



◆ 河岸由里子 ◆ (臨床心理士)

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ゴールデンウィークに日本 TFT 協会の関係で、1 週間被災地に行っていた。宮城県南部の山元町で病院のスタッフ中心の支援を予定していたが、病院だけではなく、一般の避難所にも出向いて、多くの方の支援に携わる結果となった。TFT は身体的な問題にも対処できることから、頭痛、肩こり、腰痛等から入り、その後カウンセリングが出来た。津波被害は境界をはっきりしていて、地震被害だけと違って、被害の差が大きい。そうした格差に加えて、避難している間に、かろうじて残った 2 階部分に泥棒が入り、放火までしていったと泣いている被災者に会った。地震被害、津波被害、更に、盗難と放火。こんな理不尽なことがあってよいのかと憤りを感じる話だ。他にも、塩害の問題で 3 年は使えない畑、イチゴの産地として栄えていた地域でもあるが、壊滅状態になり、しかもゼロメートル地帯になって、家も建てられない状況。ホッキ漁に使っていた船は全て流された。踏んだり蹴ったりの中での復興は、道のりも遠い。避難所の人々も少しずつ仮設に移っているが、心理的問題はこれから顕在化してくるだろう。最後に福島に寄ったが、ここはもっと悲惨だ。目に見えない放射能の被害が更に加わり、長期にわたる避難を余儀なくされる人々。仮設すら地元建てられない。住み慣れた地域から、遠く離れて生活することは、年配者にはとても辛いことだろう。「生きているうちに帰れるか」そんな気持ちを思うと、

本当に今回の被害は厳しい。7 月にまた行く予定だが、2 ヶ月の間にどのくらいの変化があるか、そして、その時に自分が一体何を出来るか、たいした役には立たないだろうが、出来ることをやって来たいと思う。

◆ 木村晃子 ◆

もう一つの連載 ~横顔~

鈴子さんの家に訪問へ行くと門のところまで女性とすれ違った。来客があったのではないかと尋ねたところ、「娘だよ」と言う。「珍しいですね。」と声をかけると、鈴子さんは「あのね」と話し始めた。

私がまだ 12 歳の頃、母は 40 歳。ある日、母は荷物をまとめて家を出て行ったの。それから、時々母の所に行くことがあったけれど、時には玄関から入れてくれないこともあった。不倫相手がいたみたい。父と母の別居生活は 1 年半続いて結局母は戻ってきた。それから、父と母はケンカが絶えなかったけれど夫婦を添い遂げたのよ。私は、そんな親をみていたから、夫婦円満が一番だと思っていた。でも、結婚した相手は浮気、ギャンブル、定職につかない。私は必死で子供を育てたけれど、40 歳になった頃、疲れちゃって家を出て夫と離婚したの。その後間もなく夫は病死してしまっただけ。子供たちは、母さんが父さんを殺したって言っていたの。しばらく子供たちとは行き来がなくなった。私は 50 歳を過ぎて、仕事関係で出会った人と再婚したの。よき理解者でね。本当に幸せだと思える日が続いたけれど、10 年が過ぎたある日、交通事故で突然この世を去ってしまった。さみしかった。あんなに悲しいことはなかった。

あの子ね、今年 40 歳。子供も二人いるのよ。最近よくここへ来るようになった。きっと、何か悩んでいるのでしょうか。あの時の私のように。そう言って、鈴子さんは遠い過去の自分を見ているような表情をした。

*北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

◆ 村本邦子 ◆

前号を書いた頃は、毎朝のように 10 キロ走り、焼きたてパンを食べ、ご機嫌な毎日でしたが、3 月の過酷なオーバーワーク+α で、すっかり体調を崩してしまいました。どことがどうというほどものではないのですが、珍しく、どうにも冴え

ない日々を送っています。この頃では、多少お腹がすいても、多少眠くても、無理がきき、普通に生活できるようになったので、「いろんなことが我慢できるようになって、私もようやく大人になったのかなあ」と自分に感心していたのですが、鍼の先生から、「それは生物として逆行しているからよくないよ」と言われてしまいました。そうなのか!? ホームベーカリーはご機嫌に続けていますが、ジョギングする元気が出てきません(まっ、10 キロ平気で走るという方が変だったという説も...)

今回は、自分が創り上げてきた小さな組織のあり方を振り返りつつ、現在、身を置いている大きな組織との関わり方を考えていました。自分を元気にする身の立て方を見つけたものだと思っています。その一方で、子どもたちの活躍(一番最近では、ラッパーの息子がハワイのラジオ放送に 1 時間ゲスト出演し)や研究所スタッフと教え子たちの成長ぶりに元気づけられています。生物学的に言えば、少しずつ弱って行って譲っていくというのがいいのかもしれませんが。大人らしく省エネモードで長続きするように。

◆ 竹中尚文 ◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職。1956 年 5 月 19 日、専光寺で長男として生まれた。生まれたときから、誰しもが「寺の跡取り」として私を見ていた。それに対する反発もあった。また、子供の頃に近所で誰かが亡くなると、学校の帰り道に悪ガキが「竹中! 葬式やな」と言って、ニヤッと笑う。それが嫌だった。人の悲しみを飯を食っていることが嫌だった。自分は絶対に坊主以外の職業に就くつもりだった。高校生の時に仏教に興味をもった。それでも葬式坊主にはなるまいと思っていた。それが、今、生奥坊主、葬式坊主、くそ坊主である。

◆ 北村 真也 ◆ 私塾「アウラ学びの

森」代表。(http://tiseikan.com)

学位論文の提出から修士課程の修了までの期間、すなわち年度終わりが私塾の主宰者としては一番忙しい時期でした。今年は私の二人の娘の受験があり、おまけに父親の入院騒ぎまで同じ時期と重なってしまいました。そして 4 月、これらすべてがそれなりの結末を迎え、さて 5 月に入って「これからの自分

をどうデザインしていこうかな」という再考期に突入しているような感覚におかれています。50代という大きな節目を前に、まさしく今その大事な準備の時期なのかもしれません。

◆ 川崎二三彦 ◆

「銀行から電話がかかってきたよ。キャッシュカード忘れたんじゃない？」

慌てて財布を確認めると、やはり…。ほんの数時間前にATMを利用した時、現金に氣を取られ、忘れてしまったのである。

「これで二度目よ！」

妻の小言を馬耳東風に聞き流し、銀行に向いてカードを返してもらおう。バツの悪さも手伝い、そそくさとその場を離れて再びATMの前に立つと、どうだろう、たった今受け取ったはずのカードが見当たらない。焦って探すと、果たしてカードは先ほど行員と話していたカウンター上に残されていたのであった。というようなことが、私には昔からしばしば起こる。加えて最近は何れや思わぬ粗相が目立つようになってきた。

「この料理、何って言ったっけ…」

「グラタンでしょ」

「そう、グラタン」

などと喋っていた時だ。

「あっ」

と、思うまもなくコップに注いだビールがこぼれてしまう。ウウム、これは単なる不注意じゃなくて誰しも避けられぬ衰えじゃないか…。と思ひ当たった瞬間、一つのアイデアが閃いた。

「そうだ、こんな失敗談の数々を呆け日記として記録しよう。10年も続ければ、老いの道筋が手に取るように浮き彫りになるぞ」

そう思って始めて見ると、不思議なことに失敗ががえって嬉しくなってしまう。

「お客さん、お忘れじゃないですか、と声をかけられたのは今月すでに2回目か」

「とっさに“手探り”という言葉が出てこなかったことは記録に値する」

*

などと書いた原稿が京都新聞に掲載されたのは、すでに7年も前の2004年夏。今は形を変えてツイッター(@kawsou_)を舞台に報告を続けている。曰く、

「あれ、座席番号50ですね、私もです。」

と思って見たらホームが違う。慌てて飛び降りたけど、危うく博多へ行くところだった新幹線京都駅の出来事」

「しまった、またしても！ 西に行くつもりで乗ったJRが東に進んだ」

「映画を見終えて帰宅したら、部屋の鍵がない！ 失敗多き人生だから、こういうこともあるかと対策は立ててあるので慌てなかったけれど、いかにも不味い」

「おやっ、革手袋が…。『今日は使わなかった筈だけど』と思ってよく見ると、なんと黒のオーバーコートが入れ替わっている！ 新幹線で隣席だった知人のものだ」

*

さて、マガジン今号の原稿。×切は6月25日だとすっかり信じ込んでいたところへ編集長から急押しメール。慌てて材料を仕込みに走り、何とか書き上げたという次第。まことに粗末様でした。

追伸：本件もちゃんとツイートしています。

◆ 団士郎 ◆

毎日出勤する場所というのは、もう十数年ない。日によって出かけるところが異なる。仕事をするパートナーが変わる。そこは全て、「仕事(図)」中心の関係である。だから日常(地)にあたる同僚がない。「図と地」はゲシュタルト心理学用語だが、私の立ち回り先はおおむね「図」だと言える。

勤め人時代、職場は「地」だった。何があるだろうと、なかろうと、先ずそこに出かけていき、挨拶をしてお茶を飲む。さて仕事の段取りはどうなっていたかな・・・と始動する。

こういう「地」のコミュニケーションが、個人のベーシックな安心感を維持する働きをしていたように思う。

だから毎日出かけるところが異なる非常勤専門職者や個人事業者の内的安心は、どのように形成されるのかずっと気になっていた。

こういう人間関係の繰り返しの中に、ツイッターとfacebookが入ってきて3ヶ月過ぎた。ネット上の知人が意識の中で新たな人間関係として場を持ち始めている。

この場の不思議さは、空間的遠近をものもしないところ。今の知人か昔の知人かにもこだわらないこと。誰の系列の知人かなども気にしない。それに、知っている人かどうか

も大したことなく、興味ある意見の人かどうかで接近が可能だ。ギブ&テイクであるべきというような拘束からも外れている。

Facebookは実名登録を原則とし、ツイッターはニックネームでも何でも構わない。前者は積極的に友人関係の拡大を勧めてくるが、後者は何も発信せずに、人の書き込みを読むだけでもOKである。

未経験の人の中には、トラブルを過剰に不安視する人もあるが、個人的経験で言えば、気にすることはない。私は両方とも実名登録しているが、ことさら支障はない。

興味のある人のツイートを読むのは面白い。一定の時間は取られるから、生活に多少の影響が出るのは仕方がない。私の場合、移動中の読書量は、随分減ってしまった。まあ何事にもプラスマイナスはある。



年長者から若年層まで。わりにフラットにやりとりできるのもこのツールの良いところだろう。毎日必ず、ご機嫌を伺うし、自分も出来るだけ一日一回以上の書き込みをしようとしている。

TL(タイムライン)は自分が構成するのだから、新聞やTVニュースのように、皆が同じものを見ているわけでもない。

この公然化された私的コミュニケーションは、従来型のコミュニケーションとは異なるから違和感のある人や、つまらないと思う人もあるのは当然だろう。その上で、まず私のツイートをご覧下さい。google検索で「ツイッター 団士郎」。登録しなくてもご覧いただけます。

◆ 中村周平 ◆

対人援助マガジン 連載のタイトルは「ノーサイド！」にしました。ラグビーは試合終了時「ゲームセット」ではなく、「ノーサイド」と言います。

試合が終われば敵味方という「サイドをなくし(ノーサイド)」、お互いの健闘を讃え合うところからきています。

事故を境に、かつての指導者と対極の立場となり、終りの見えない試合を続けていた私にとって、大学院における修士論文作成、家族クラスターの先生方の言葉はノーサイドの笛の音だったのだと思います。

◆岡田隆介◆

先日、明石書店から「家族が変わる 子育てが変わる コミュニケーションのヒント」という本を出しました。本は書くよりも売りたいへんで、できれば新書サイズにという希望を持っていたのですが無理でした。でもこれまでの本よりはずっと軽く安いので如何？って、勤め方が違うか…。

家族が変わる子育てが変わる コミュニケーション のヒント



◆鶴谷圭一◆ (幼稚園園長)

5月中旬に団遊くんが世話人を務めて、見学会を計画してくれました。宮城県仙台市のM幼稚園の見学会です。「え？こんな時期に？」「こんな時期だからこそ…」という訳で、行って参りました。

今までいろいろな幼稚園、保育園を見学してきて「もう、そんなに驚くことは無い」と高をくくっていた私ですが、その幼稚園の規模の大きさとバイリンガル教育にかける力の入れように驚きの連続でした。1日目は幼稚園の概要や教育内容の話をして5時間聞き、翌日は東日本大震災を体験した幼稚園の「その時・その後」と被災地への貢献の話をして5時間聞いて、またまた驚くやら感動するやら…。幼稚園って、ほんとにいろいろだなあ、ということを感じたのでした。

その日の夜は、仙台市内に住む僕の祖母107歳を訪問し、自力で食事や排泄もなし、寝ていることが多くなったそうですが、そのことを気にしていた祖母の笑い話ひとつ。へ

ルパーさんとの会話で、「食べて寝ているばかりで申し訳ねえ、ハローワークさ連れてってける！」と言ったそうです。最初は「職安」と言ったそうですが、ヘルパーさんに「いまは、ハローワークって言うのよ」と聞いたあとの発言です。長生きの秘訣でも講義する？なんて笑いましたが、そんな気概が長生きの秘訣かもしれませんね。私も見習いましょう。

◆藤信子◆

日本集団精神療法学会（以下 JAGP）第28回大会の大会長を終えたら、少しゆっくりできると思っていたところにこの大震災が起こった。これまで16年間災害支援者のためのグループを実施してきたこと等もあり、JAGPの企画の「東日本大震災関係者の相互支援グループ」の委員になった。それで、今年中は各地で「相互支援グループ」を行うことになり、4名の委員はそこに参加してコンダクター、ココンダクターを務めるので、出かける日々はなかなか終わりそうにない。それで大会前に考えていた「今度の大会を終えたら、少しゆっくりして」という計画はどこかに飛んでしまった。

大学の中では、心理・教育相談センターにおける、小児脳腫瘍の後遺症の人のグループのメンバーが増え、グループに参加する実習生と、グループの運営や個人のセラピーについて話す時間が増えて忙しくなったが、新しい材料や課題を考えるのは楽しい。こういうことだから仕事が減らないのだろうか。

◆中島弘美◆

対人支援の仕事や勉強を続けているなかで、同じような職種の人とばかり、かかっているのはバランス良くないように感じて、働く女性の会「よこの会」に入会しました。この会は、関西を中心に約150名の会員で構成され、民間企業の社員、公務員、経営者、フリー専門職などが、お互いの仕事の情報交換をしたり、ノウハウを学んだり、講師を招いて知識を得たりして、長く働き続ける知恵を培っています。入会して15年ほどになりますが、この会は働く女性にとってまさに対人援助組織で、その運営がすべて会員のボランティアでなっているところも特徴だと思います。

6月例会は『ワールドカフェ』を体験し、7月は、高齢者デイサービスセンターの施設長をお招きして、施設の立ち上げや利用者支援の工夫などをお話いただく予定で、現在例会プロデューサーとして準備をしています。

関心がおありの方は [よこの会](#) で [検索](#) してみてください。

参加希望の方は、直接お申込みいただくか、CONまでご連絡ください。

◆千葉晃央◆

ヨキ結果ヨリモ、
義ヲ尽クシ、
己ダケノ正シキヲ貫キ、
散ルコトハ、
美シキコトカ？

大震災復興事業、貧困・格差社会、均一ショップの全国展開、百貨店の大衆化、少年犯罪の横行、子による親殺し、自殺（心中）のブーム、アメリカ化、2大政党制、風俗潜入ルポなど、これらはすべて80数年前の戦前昭和にあった出来事です。今と共通項もありますか。その後、軍国主義、敗戦、GHQによる民主化という道をたどるのです。私たちがこれから辿る道はどんなものか？あの時も「資源」がターニングポイント。そこからの脱却という意味で期待もあったのが「原子力」というのは事実なのでしょう。ただ、多くの犠牲を払ってでも、「本音」と「建前」を両立させるということには、断固反対の思いです。日本の歴史が動いた多くの場面で、そんなエピソードがありすぎます。圧倒的に今と戦前昭和が違うのは、「寿命」です。30年ぐらい違うようです。その長くなった人生をどう生きるか？その質に関して、問われているように思います。戦前昭和を駆け抜けた女性の一人北村兼子は、複数の著書、風俗潜入ルポ、初の関大女子大学生、女性パイロットとして冒険の企画、名だたる文化人との交流などのエピソードが残っています。彼女は27歳の若さで、腹膜炎で死去です。「盲腸」です。この頃は抗生物質がないので胃腸炎でも亡くなります。短く生きた日本人たちは、今の日本、日本人にどんな思いを抱くのかききたいところです。そんなことを考えながら、戦前昭和にはまっています。

◆浦田雅夫◆

現在、京都弁護士会子どもの権利委員会の
安部千秋弁護士、吉田雄大弁護士を中心に、
京都に関西初の子どもシェルターを作る活



子どもセンターののさん

動が始まっています。私も微力ながらかかわ
っています。今回のマガジンにはそのこと
について書かせていただきました。たまたま芸
大の教員をしていますので、まわりにはア
ートやデザインを専門とする教員や学生が大
勢いますので、ロゴマークやチラシ、リーフ
レットなどの制作を頼みました。このプロセ
スのなかで、ロゴマークができるまで、一枚
のチラシのできるまでがよくわかりました。
おかげで電車の広告や看板、チラシなどが妙
に気になるようになりました。何を伝えたい
のか、クライアントの意思を反映したもの
になっているか、かつデザイナーの味も加わ
っているかなどを感じ、一枚のチラシから醸
し出される雰囲気や少しく味わえるよう
になりました。面接と同じですね。6月25日 京
都ひとまち交流館ぜひ、おこしやす。

◆ 荒木晃子 ◆

立命館大学グローバル・イノベーション研
究機構客員研究員 島根県内田クリニック
生殖医療心理士 精神科・岡田医院 心理士
最近、自分の職位を「精神科の心理士です」
という機会が減った。仕事が減ったのでは
ない。他に忙しいことが増えたのだ。うれしい
悲鳴をあげながら、つい先日も自分の誕生日
を忘れ、予定を入れて仕事で走り回っていた。
ついでに、年齢も忘れられたらいいのにな。
そういえば、数年前、恩師の先生から「荒木
さん、不妊の話、これから百回はすること
になるでえ〜」といわれ、ぎょ！とした経験
がある。昨年まで、「えっと、今日でさんじ
ゆう何回め〜」とおもしろがっていたが、そ
れ以降カウントできなくなった。きっと、天
国の父も喜んでくれるだろうな。折角なの
で、この場を借りて、コマーシャルを。
* 島根県松江市にて「第2回 団先生の家族

WS」が7月よりスタートします。参加受付中
お問い合わせは島根家族援助研究会
担当：大村 simanekazoku@yahoo.co.jp
* 2011年9月3日(土)立命館大学で「家
族のく創成と再統合」シンポジウム～生殖
医療と里親・養親～」を開催予定。入場無料。
ドキュメンタリー映画の初上映あり、豪華キ
ャストによる講演やパネル・ディスカッショ
ンあり。どうぞ期待！

◆ 松本健輔 ◆

カウンセリングルームHummingBird 主宰
<http://www.hummingbird-cr.com/>

結婚相談所を辞めて、夫婦・カップルの問
題解決のためのカウンセリングルームを設
立して一年半。開業し、試行錯誤しながら必
死でここまでやってきました。その中で問題
を解決されたクライアントさん増えてきま
した。その終結された方から最近「悩んでい
る知人を紹介をしたい」とメールを頂いたり、
「落ち着いたから改めてお礼を」とお手紙を
頂いたりとうまくやることが実りつつ
ある感じがしています。

そんな中、最近になって結婚相談所で出
会った人との結婚を悩んでいるクライアント
さんや、結婚相談所で結婚した後夫婦で問
題が発生し来所されるクライアントさんが
増えてきました。結婚という一つのキーワ
ードでは前の仕事と関連しているつもりで
はいましたが、正直こういう形で前の仕事と
の点と点が線になるとは思っていません
でした。こういうふうこれから自分のやっ
てきたことが一つ一つ繋がっていく、そんな
仕事ができたらほんとに幸せだと思わせて
くれる出来事でした。

◆ 西川友理 ◆

いくつかの学校で、社会福祉士・精神保健
福祉士・介護福祉士などの、福祉系対人援助
職養成に携わっている者です。学生達と過
す日々の中で見えてくるものを書いていま
す。

東日本大震災から2ヶ月半。日本中
にいる人全てが、多かれ少なかれ心のど
こかでいつも被災地のことを抱えつ
つ、生活をしている日々です。同じよ
うに被災地のために、と思いつつ、ま
ったく真逆の事をしている人達
がいて、それぞれがそれぞれを批判
している状

況もあります。「そんなのは復興支
援と言えない」「それは単なる自己満
足だ」というふうに。被災者のニー
ズもばらばらなんだから、支援の仕
方も色々あるのは当たり前と思う
のですが…。

「トータルで見ると日本は被災地
のことを常に気遣いつつも、わりと普
通に機能出来ているみたい。だから
被災地支援は必ずなされるし、また
立ち上げられるよな」…と信じて
もらえるように、被災地以外の人
たちは、いつもよりちょっとだけ頑
張りながら、出来るだけ普通の日
々を過ごすことも、また1つの支
援かもしれない、と思います。

◆ 団遊 ◆

このマガジンにも寄稿している原町
幼稚園の鶴谷さんたちと一緒に、被
災時に救援物資の配給基地となり、
複数のメディアでも活躍ぶりが取り
上げられた仙台市・M幼稚園に行
きました。あの時、実際に幼稚園で
起こったことと、被災園が今考
える子供の安心・安全とは？を学
ぶためです。

いくつも印象的なことがありま
したが、中からふたつ取り上げま
す。

ひとつは「全員が冷静に動けるこ
とを前提としたマニュアルは意味を
なさない。また、その場で考えるこ
とは不可能なので、アクションを細
かくリスト化しておかないといけ
ない」ということです。

もちろん、M幼稚園にも震災マニ
ュアルがありました。しかし、職員
の何人もが未曾有の衝撃にパニック
になり、冷静に動けなかったそう
です。また、なんとか子どもを誘
導できた職員も、そのような中で
冷静に次のアクションを考える余
裕はありません。結果から見ると
「万全を自負していたマニュアルは、
あまりにお粗末だった」と副園長
は振り返っていました。



ふたつ目は「子どもたちにとって
最大の支援は、一日も早く元の生
活に戻してあげることだ」という
話です。震災を機に、下痢が止ま

らない、不眠が続く、涙が止まらない、言葉数が減る、食事を摂らない、さまざまな変化が子どもたちに起こっています。それを食い止めようと、誰もが心のケアに奔走し、有事の中でも幸せな状況をと気にかけます。

しかし「有事である」という困りとプレッシャーが、子どもたちを苦しめていると言いました。未だにテレビはACの広告が続き、親が不安を口にします。その不安は子ども心に届き、処理不可能なわだかまりとなって深く浸透していきます。「知らない方がいいこともある」という言い方がありますが、対応策を持たない子どもには、大震災のことをリアルタイムに伝える必要はないのかもしれませんが。その情報との遮断こそが、何よりの支援かもしれません。

子どもたちを元気づける一番の薬は、多少無理をしても園を開き、震災前と変わらぬ生活を送らせてあげることだと言いました。園庭で遊ばせることにはもちろんリスクが伴います。しかし、リスクヘッジで子どもの心をつぶしてしまつては、元も子もありません。実際に、先に挙げた状況が、開園で改善された例がいくつもあるそうです。難しい選択を強いられている園がたくさんあります。学びの多い仙台でした。 2011.5.25記

◆水野スウ◆

東京生まれ。石川県津幡町の住人。週いちオープンハウス「紅茶の時間」家主。コミュニケーションワークショップ「ともの時間」の水先案内人。1988年よりミニミニコミ「いのみら通信」編集人。

3.11後の最初のマガジン原稿は、いのみら通信の由来について書きました。21年前に自分で出した「紅茶の時間」の本、『まわれ、かざぐるま』を何度も読み返しながら。この本は、娘が生まれたころや紅茶の時間の始まりのころを書いたものだけど、一見、子育て本っぽく見えながら、後半3分の1は見事に原発の話。

出版社を通さないから当然、流通ルートに乗らず、本屋にも並ばず。そのかわり、全国にいる通信の読者さんたちが、それぞれのおうちで小さな本屋さんをしてくれて、本はたくさんの方のところへ飛んで行きました。出産祝にもよく使われ、読み進むうち、いつの間にやら原発入門、としてよこばれた？み

たいです。

手渡し感覚の本のひろがりから、新たなネットワークも次つぎ生まれて、この貴重な経験が、本の産地直送っておもしろい！と私に確信させてくれました。冊数が残り少なくなった今、ネットで見つけてご注文くださる方がふえました。

娘と協働制作の次の産直本『贈り物の言葉』は、この夏、出版の予定です。

◆尾上明代◆

編集長さま 入院は何とか免れました・・・が、やはり体調は、かなりシンドくて、とても残念ですが、今回の投稿は無理です。昨日は夜にも京都でWSをすることになっていたのに、帰宅が真夜中で、今日も先ほど帰宅。余力がなく、今夜からまた寝込みそうです・・・。

先週末に書く予定だったのに、できなかったのが、やはり原因です。ご迷惑おかけして申し訳ありませんが、よろしくご了承下さい。

◆サトウツヤ◆

地名には歴史が刻まれている、とは時に聞く言葉である。それほど大げさでなくても、土地の特徴を名前にするというはあり得るだろう。ニックネームのようなものだと考えればいい。杉の木が一本立っている場所を「一本杉」と呼んだりするのは決して不思議なことではない。このほどの大震災に見舞われた荒浜などという地名も由来は何となく想像がつく。

東日本大震災で、様々な地名と出会うことになったが「ゆりあげ」という地名には仰天した。音で聞いているだけでは、きれいな響きの地名であるが、漢字で初めて見た時は、飛び上らんばかりに驚いた。閑上と書いてゆりあげ。「ゆり」は門構えに水なのである。不謹慎だが津波水害の場所に無縁とは思えない。しかしこんな漢字はありえるのだろうか？そして、すぐにインターネットで由来を調べてみた。すると、名取市閑上公民館のサイトにすぐにたどり着いた。

<http://www.city.natori.miyagi.jp/public/yuriage-kou/index.html>

「閑上」地名の由来を読むとまたびっくり。

名取川河口にある閑上浜は、昔「名取の浦」と呼ばれていた。清和天皇の貞観(しょうか)13年、この海岸に霊験あらたかななる十一面観音像が、波に「ゆり上げ」られたのを漁師

がみつけた。それ以来この浜を「ゆりあげ浜」とよんだ。現在高館山的那智神社に安置されている那智観音像がそれであると伝えられている。「ゆりあげ浜」の文字を「閑上」と書いたのは、いつ頃か定かではないが・・・、以下略。

だそうである。由来は貞観に遡るといふのだ。貞観といえば平安時代。貞観地震として知られる巨大地震が起きた時である。貞観13年(871)の2年後に「ゆりあげ」られた十一面観音像が見つかったというのであるから、これは単なる偶然の一致ではないだろう。貞観と平成という時をこえて千年に一度級の二つの巨大地震がおきた。これらと「ゆりあげ=閑上」とは無縁ではないはずだ。

地名といえば、Fukushimaという地名が世界的に有名になった。外国人と話をするとき、「京都に来る前は福島にいた」といっても殆ど通じなかったが、今ではワールドワイドである。福島に住んでいたころ、地元テレビでは「Happy Island=福島」というコマーシャルが流れていた。ハッピーアイランドに戻るまで時間はかかるだろうが、息の長い支援(がもし必要なら)を続けていきたい。その福島大学で元同僚たちが必死に頑張っている。そんな様子を垣間見ることができるサイトを最後に紹介しておきたい。

ガンバロウ福大！行政の「結」

<http://311gyosei.blog.fc2.com>

福島大学震災義援金の受け入れについて

http://www.fukushima-u.ac.jp/kinkyu/20110329_01.html

福島大学避難所日誌

<http://fukudai311.blog.fc2.com/page-1.html>

チェーンメール考(立命館大学人間科学研究所エッセイ)

<http://www.ritsumeihuman.com/essay/index.html>

◆脇野千恵◆

◆学校現場は相変わらず多忙です。今、所属の2年生の職場体験の引き受け先の事業所探しをしています。これって教師の仕事？と思うのですが…。最近是不況も重なり、中学生の仕事体験に協力する余裕はありませんと断られたり、人数を減らされたりと、年々厳しい状況にあります。約300名の仕

事場探しは、努力では解決できない課題となっています。少なくとも130カ所以上の事業所確保が必要で、これから夏休みにかけて営業の仕事に翻弄されそうです。

◆来週から教育実習生が6名やってきます。以前講師なのに実習生を持たされ、いやな思いをしたことが思い起こされますが、長く教師をしていると教え子がどんどんやってくるようになります。先日も挨拶に来た学生に呼び止められましたが、どうも名前が思い出されずかわいそうなことをしました。若い先生がやってくると、一番に喜ぶのはベテラン教員。ちょっとセクハラめいた発言も気になります。約一ヶ月職員室は賑やかになりそうです。

◆中村 正◆

立命館大学に勤務して23年目となった。29歳の若い赴任だった。その3期生にあたる卒業生とばったり会った。大学近くの、いつもゆっくりと本を読んだり、原稿を書いたりしているカフェだった。当時から彼女はとても印象的だったのですぐに名前と顔を思い出した。センスのよい年賀状をいつもくれた。デザイナーとして仕事をしている。久しぶりにいろんなことを話した。最後に、今、こうした『対人援助学マガジン』を出しているので、みておいてとすすめた。早速読んでくれたらしく、ほどなくしてメールが届いた。一読者の感想ともなっているの、一部修正の上、本人の承諾も得て、ここに紹介しておきたい。

.....

中村先生

先週土曜日はおくつろぎのところ、または深い思索をされているところを突然お邪魔しました。1993年卒業の松浦です。

視界の先に中村先生がみえたときには、驚くというよりはごく自然に歩み寄って行ってしまいました。それは中村先生にたいして、私のこころに時間的な断絶がないからと申しあげてもよいかもしれません。

20年、日々この社会に生き経験したことを、「関係性の病理」の発見として、心のなかの中村先生(的なもの)にレポートする習慣になっているのです。

例えば先週水曜日は映画『ブラック・スワン』を観、ホラー映画的に怖がる女子を横目に、

いろんな要素が含まれているのに描ききれなくて残念、中村先生に編集し直してもらいたいナ、などと思っていたものですから3日後の土曜日の夜、先生にお会いしても違和感がなかったのです。

さて、『対人援助学マガジン』読ませていただいております。素敵におもしろいです！さすがに勉強しなくては、すべてすっきり理解できるわけではないのですが。

その感想を一気にここで話すのは控えますが、とにかくおもしろくてなりません。実社会で日々体験しているcaseを分類できる、立派なファイリングホルダーをもらえたよう。わたしのホルダーは20年前のままだったので喜びひとしおです。

対人援助学会が研究機関として活発に活動していることも興味深いです。ちなみに地方の里山から逃れてきた大学生のときは、社会病理学的視点を「これだ、助かった」とおもっていました。マガジンの率直な感想としては「たのしい、助かった」という視点より、「おもしろい」。専門職なので、比較的自由な働き方をしています。一息つくとき呼び出してください。コーヒー、ひとりじゃないときもまたよい時間ですよ？

.....

嬉しい感想だった。二十歳だった彼女ももうアラフォー。苗字がそのままだったから、独立独歩の人生なのだろう。その出で立ち、言葉遣い、そして闊達な印象に仕事を楽しんでいる様子が伝わる。何よりもゼミで話したことが生きている！こんな風に大学での学びをひきうけてくれているのかと感じいった。まだ青臭い教師だった頃を思い出しつつ、心地よい疲れと珈琲の香りで満たされた土曜の夜だった。

◆早樫一男◆

4月から変わったこと、変わらないこともっとも大きな変化は仕事が変わったことです。当然、勤務場所も変わりました。しかし、朝の目覚めの時間はあまり変わりません。6時前後には目が覚めます。仕事に出かけるまでの1~2時間、パソコンに向かって、ひと仕事しています。これは、これまでできなかったことです。公務員生活を退職後もメリハリのある仕事に恵まれていることには、

本当にとっても感謝しています。

長年の自家用車通勤は交通機関利用に変わりました。私にすれば、歩く生活が飛躍的？に増えました。おかげで、毎朝、ズボンを履くときに、「お腹周りが少しスリムになっているかも？」とひそかに喜んでいました。目標はあと5cmぐらいスリムになること。

管理職という立場での気遣いとは全く無縁になりました。これもとても大きな変化です。相変わらず、夜の帰宅時間は遅く、夕食を食べて(アルコールも)、すぐに寝るとい生活スタイルに変化はありません。

昨年の職場、一昨年の職場、さらにもう一年前の職場のメンバーが、時折、「一杯飲みましょう」と声をかけてくれます。アルコールとの付き合いは変わらないまま一生過ごさそうです。

◆大野 睦◆

大阪生まれ。幼稚園時代、朝のご挨拶が出来ず自閉症児として扱われる。自然や動物が好きな子供は自然豊かなところで生きていきたいと大学卒業後に屋久島に移住。エコツアーガイドに就き、ネイティブビジョン設立。1998年独立、2001年法人化。2008年屋久島観光協会ガイド部長就任。満月の光と2000本のキャンドル、僅かな電力、そしてアーティストはじめ総スタッフ全員ボランティアで開催するコンサート「やくしま森祭り」発起人。

BLOG:

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

Twitter:

<http://twitter.com/mutsumiohno>

雑誌の新たな利用法

対人援助領域全ての教科において、学生のレポート題として、この雑誌を指定します。WEB上に常にバックナンバーがあるので、手に入れやすいでしょう。

この中から関心のある文章を選んで論評させるのはいかがでしょう。幅広い多分野の執筆陣ですから、学生も関心を持ちやすいのではないのでしょうか？